

「第8回スポーツ環境会議」議事録

平成29年2月1日(水) 午前10:00～11:30

新宿区役所6階第4委員会室

1 出席者

1	間野 義之 (学識経験者)	11	関口 美緒 (公募委員)
2	今泉 清隆 (区体育協会)	12	藤原 千里 (公募委員)
3	金子 和子 (区スポーツ推進委員協議会)	13	山本 秀樹 (生涯学習スポーツ課長)
4	小菅 知三 (区レクリエーション協会)	14	下杉 正樹 (新宿未来創造財団等担当課長)
5	山田 和男 (区町会連合会)	15	小林 正明 (障害者福祉課)
6	徳堂 泰作 (区障害者団体連絡協議会)	16	高野 亮 (地域包括ケア推進課)
7	大塚 フジエ (区青少年育成委員会)	17	関原 陽子 (子ども家庭課長)
8	山本 芳裕 (区小学校PTA連合会)	18	佐藤 光子 (みどり公園課)
9	大嶋 英二 (区中学校PTA協議会)	19	木城 正雄 (教育調整課長)
10	小宮 高之 (スポーツ関連事業者)		

欠席者 3名

辻 彌太郎 (区高齢者クラブ連合会代表)

小柳 俊彦 (新宿未来創造財団事務局長)

中川 誠一 (健康政策課長)

配付資料

資料1 スポーツ環境会議設置要綱

資料2 スポーツ環境会議委員名簿

資料3 関口委員からの情報提供「来日外国人とスポーツ 学生へのインタビューを例に」

その他 (チラシ)

- ・新宿コズミックスポーツセンター「トップアスリートによる小学生水泳教室」
- ・新宿スポーツセンター「スポーツ著名人による特別水泳教室」
- ・新宿スポーツセンター「スポーツ指導者講習会」

2 事務局

生涯学習スポーツ課

3 会議内容

(1) 開会

(2) 生涯学習スポーツ課長あいさつ

1月29日に開催された第15回新宿シティーハーフマラソン・区民健康マラソンは、皆様のご支援により無事に開催できたので感謝申し上げます。新宿区スポーツ環境整備方針を継続的に着実に推進するためのスポーツ環境会議も今回で8回目となる。今回は、前回の会議以降に皆様が取り組まれた活動内容や、今後予定されている取り組みなどの報告とともに、障害者スポーツについて意見交換を行いたい。

ご承知のとおり、東京2020大会まであと3年であり、2019年にもラグビーワールドカップが開催されるなど、大規模かつ国際的なスポーツイベントが今後日本で順次開催される。新宿区としてもこれを契機と捉え、区内の様々な関係団体のご協力をいただきながら、新宿区全体の東京2020大会に向けた機運醸成を図り、スポーツを通じた地域コミュニティのさらなる活性化を推進していきたい。

また、平成28年度から実施している新宿区第三次実行計画では、「スポーツ環境の整備」として、子どもから高齢者までが個々の目的やライフステージに応じた多様なスポーツ・文化活動に親しめる環境づくりに取り組んでいる。今日は皆様方からスポーツ人口を増やすための貴重なご意見をお聞かせいただきたい。

(3) 情報交換・意見交換（要旨）

ア 各団体・委員からの報告

・現在スポーツの産業促進化議員連盟が発足しており、私もスポーツ未来開拓会議という、現在のスポーツGDP約5.5兆円を2025年までに3倍の15兆円にするというプロジェクトに携わっている。スポーツで稼ぐのは今まではタブーとされていたが、2015年にスポーツ庁ができたことによってスポーツで稼ぐという考え方が認められつつある。これまではスポーツは学校教育のなかに縛られていて、経済的な成長の余地を見過ごしてきたが、現在転換機を迎えている状況だ。

2019年のラグビーワールドカップ、東京2020大会、そして2021年には生涯スポーツの世界最大の祭典であるワールドマスターゲームズもあり、3年連続で世界的なビッグイベントが日本で行われる。新宿区にはたくさんのスポーツビジネスの資源があり、多くの人々が訪れると思うので、スポーツで稼ぐという視点を持ち、これらを契機としてどうしたらスポーツによって区民の皆さんをより豊かにすることができるか、ご検討いただきたい。

また、私は東京都スポーツ振興審議会の委員をしており、そこでスポーツと共生社会に関する提言をしている。マイノリティと呼ばれるのは障害者だけではなく、例えば在日・訪日の外国人やLGBTなど、様々な人々がいる。新宿区はまさに多様な人が集うまちなので、ぜひ新宿区がスポーツと共生社会のモデルになってほしいと思う。

・新宿区体育協会としては、高齢を理由としてスポーツを辞める方が出てきており、また若い人があまりスポーツをしないという現状に困っている。多くの方が関心を持っているのが東京2020大会のボランティアについてだと思う。平成29年度に日本体育協会から、2020年の4月1日現在で18歳以上となる方を対象としたボランティアを公募する計画があると聞いている。しかし、この募集は日本国籍の方に限定するということなので、前回の会議で話のあった日本にきている留学生については、なんらかの特別枠がないとお手伝いいただけないかもしれない。ただし、ボランティアは、大会ボランティアと都市型ボランティアに分けるという話であり、留学生の方は語学ができる点で都市型ボランティアへの参加について非常に有利になるのではないかと。新宿区体育協会にもボランティアの希望者が多くおり、日程次第ではあるが、せっかく東京で開催される大会で新宿区は東京の中央に位置しているのだから、たくさんお手伝いしたいと考えている。

・来年度は新宿区が策定した総合計画の最後の年になる。スポーツ環境会議の設置要綱によると意見交換が会議の主たる狙いだが、意見交換だけではスポーツ人口は増えないし、スポーツ実施率も上がらない。従って、29年度は第三次実行計画の最後の年でもあるので、ぜひこの会議でスポーツ人口を増やしたり、実施率を上げるための具体的な取り組みをお話しいただきたい。各団体の実践活動や行政の取り組みについてはたくさんお聞きすることができたし、事務局でもまとめてくれているので、ぜひこの場では、どのように策定方針の実現を目指すのかということについてお聞きしたい。

・新宿シティハーフマラソンは、新宿区町会連合会からも多くのボランティア参加者がおり、また近隣の町会や関連団体の方のご協力があって無事に開催できたと思う。警備に関しては過去の大会でトラブルがあったものの、それ以降はプロの方が入ることで非常に警備がよくなり、スムーズに進行できたと感じている。また、吉住区長とお話した際に、新宿シティハーフマラソンを新宿区全体を走るコースへ広げていくことについてお話があったので、ぜひ実現してほしい。一番ハードルが高いのは警察関係だと伺っているが、新宿区としてぜひ推進していただき、できれば東京2020大会の前後を目途に開催していただきたい。大回りのコースにすることによって地域に交通規制等の迷惑がかかるという話もあるが、私の知っている限りでは地域からの反対の意見はあまり聞かないので、ぜひ実現できるようにがんばっていただきたい。

あと、近隣の小学校の方から東京2020大会の聖火リレーについて、地域の小学校の子どもも参加できないだろうかという話を聞いた。その小学校は2020年に周年行事があり、行事と関連させて聖火リレーに参加したいということだったので、関連する情報が出てきたら新宿区としてご検討いただけたらと思う。

・現在障害者スポーツを広めるためのイベントが多く行われており、障害者団体連絡協議会でもイベントを実施している。しかし、集客に関していうと、多くの方に知っていただくことが難しい状況がある。新宿未来創造財団の協力を得て月に1回障害者向けの卓球やフットサルの体験会を実施しているが、参加者があまり集まらない。夜の時間帯に実施していることもあるが、障害のある方の特性として、自分から体験の場に出向いていくのが難しいのが現状だ。新宿区の広報等でも紹介していただいているが、情報の多い現在ではうまく伝達していかない。そういう点において、色んな企業や団体を活用する方法を考える必要がある。

また、障害を持ったアスリートの方が色んな形で脚光を浴びているが、2020年を過ぎても、アスリートだけではなく、障害のある方が普通にスポーツを楽しめる環境を作っていくことが重要だ。環境づくりという点では、障害のある方に来てもらってやるというのが難しいという点を考慮し、こちらから出前として出向いていくスタンスも必要だと考えている。

・青少年育成委員会は10地区あり、中学生が中心になってマラソン大会や運動会等を運営している。私のいる落合第一地区では、3月25日から27日まで2泊3日で南会津高原のだいらスキー場に行く予定であり、今年度で17回目になる。今一番困っているのは、参加者がたくさんいるのに、引率の大人があまり集まらないことだ。参加者は小学校3年生から高校生まで約120名もいるのに、スタッフは十数人しか集まらないの状況であり、継続していくことの難しさを感じて

いる。地域の子どもたちにとっては、スキーやスノーボード、雪国体験等、色んなことを体験できるいい機会だし、子どもたちのなかでも上級生が下級生の面倒を見たり、中学生や高校生、大学生、社会人になってからお手伝いにきてくれる子もいる。しかし、私としては青少年育成委員会の委員がこういった活動の場に行かなかつたら意味がないと考えている。皆様からこういった課題を解決できるヒントとなるお話があれば、参考にさせていただきたい。

・小学校PTA連合会では毎年の行事として、10月に神宮外苑グラウンドでのソフトボール大会、11月にスポーツセンターでのバレーボール大会、1月に卓球大会と、3つのスポーツ交流大会を実施している。また、子どもたちに向けては、代々木体育館で行われたバスケットボール女子日本代表の壮行試合や、フットサルのFリーグの開幕試合に新宿区の子どもたちを招待してもらった。

それから四谷第六小学校では、4月のスポーツテストの前に元ヤクルトスワローズの選手に来ていただいてボールの投げ方教室を実施している。ソフトボール投げの記録は東京都は全国的に少し下のほうで、さらに新宿区はそのなかでも下のほうで、四谷第六小はさらにそのなかでも下のほうだったが、新宿区の真中くらいのところまで上がってきた。夏場にはリオデジャネイロ2016大会に出場した古賀淳也選手に来てもらって水泳教室を行った。2月には、神宮外苑で四六マラソンというのを行う。四谷第六小学校のPTAに箱根駅伝に出場した駒澤大学の出身者がいるので、走り方等を直接子どもたちに指導する予定だ。

新宿区にはこれから東京2020大会という大きな国際大会がやってくる。私がリオデジャネイロ2016大会で見てきたもの、体験してきたものをぜひ還元していきたい。まずは私のいる四谷地域から、アスリートだけではなく世界各国からいらっしゃる方々に、東京はいいところだったと思える場や、こんなところでスポーツ体験できるんだという場を、子どもたちを通じながら提供していきたい。ちなみに、昨年12月には、ニューヨークヤンキースの田中将大選手やプロゴルファー選手にご協力いただいて、子どものための野球教室やゴルフ教室を開催することができた。働きかけを続けていると必ず色んな方々が共感してくれるので、東京2020大会の中心である新宿で、引き続きスポーツの企画を展開していきたい。

・落合中学校ではトップアスリートに触れるということで、ソウル1988大会とバルセロナ1992大会に出場した体操選手の西川大輔さんの講演を企画しており、オリンピックの生の話を聞くことでスポーツをもっと身近にするといった取り組みを行っている。

また、新宿区では小学校の学校選択制が廃止の方向だが、中学校は部活動やスポーツ関係も絡んで学校選択制が継続されると聞いている。中学生のスポーツ環境という点で考えると、なかなか難しい問題も色々あるように感じている。

・新宿スポーツセンターでは、区民の方にスポーツを楽しんでいただく環境を整えることと、スポーツを行う機会を増やすための企画を立てて運営している。現在プールやゴルフ、カルチャー教室等のカテゴリーに分けて様々なスポーツ教室を行っており、約2,500人の方に登録していただいている。また、昨年11月には障害のある方のプール個人利用料金の減額の規定ができて、合わせて区でプールのバリアフリー工事を実施しており、障害のある方もない方も利用しやすい施設づくりが進んでいる。

障害のある方もない方も参加しやすいイベントを実施するというこゝで、3月12日にスポーツ著名人による特別水泳教室というイベントを行う予定だ。オリンピックの方とパラリンピアンの方をそれぞれお呼びし、健常者の方と障害のある方、どちらも参加できるようにする。また新宿区のスポーツの指導者支援としてスポーツ指導者講習会を行う予定であり、新宿区のスポーツ実施環境の整備について、指定管理者の立場から携わっていきたいと考えている。

・私は色々な大学で非常勤講師として日本語や日本文化論を教えており、外国人と触れあうことも多いので、そういった視点からの情報を皆さんにお伝えしたいと思っている。実際の外国人についていうと、スポーツで関わる外国人は実績のあるアスリートばかりだと思うが、私の教えている学生たちは非常にまじめで勉学に励むようなタイプが多い。世界各地から日本に来ており、ヨーロッパ系のクラスや中国系、東南アジア系のクラスもある。イラズム系のクラスや、アフリカの子もいるし、全員アメリカ人のクラスもある。こういった一般の学生がどのようにスポーツに触れあうのかということ色々と調査している。外国人は日本人と触れ合える機会を欲しているが、言語の壁があったり、日本人のグループで集まるという文化性に対して、怖くて中に入れないと感じている。外国人はいるだけで注目されるなどコマーシャル性があるので、活用しないのはもったいない。また、外国人でもスポーツだけで生きて行けるのは一握りに過ぎないが、日常生活のなかでスポーツをやりたいと感じている外国人はたくさんいる。

私は関東圏の国公立大学で教鞭を取っているが、そういう大学には外国から国を代表するトップの学生たちがくる。そういった学生たちは国に戻ると、国の将来を背負って働くようになる。私の知り合いのドイツから来ていた元留学生も、今は政府のかなり上のほうで働いている。そういう学生たちが日本でスポーツに触れていくのは、長期的に見ると、今若いからスポーツを楽しんでやるというだけではなくて、学生たちが将来国に戻った際に日本で得た経験を活かせるというメリットがあるので、そういうことまで考えて、外国籍の方にも窓口を開いていただければと思う。

・重症心身障害児の自立支援をしており、今スポーツの関係で特に力を入れているのは、教育を終えた子どもたちの学校卒業後のスポーツ環境の確保だ。特別支援学校では東京2020大会に向けて大変盛んにスポーツを行っており、指導者から質の高い指導を受けることができ、体育館を自由に使ってかなりの時間スポーツに触れることができるなど、非常によい環境にある。障害が重いため部活動という概念が一昔前まではなかったような子どもたちも、現状ではクラブ活動という時間を体験できるようになった。ただ、残念なことに、高等部を卒業するとそういう環境が一切失われてしまう。地域では色々な障害者スポーツが盛んに広まっているが、足元までそういった環境の整備がされていないのが現状だ。新宿区はハード面でいい施設があるが、一般の方たちの利用もあるために取りたい時間帯に利用できなかつたり、駐車場やトイレ等の設備の問題もあって、思ったような環境が整っていない。

新宿にNPOセンターの多目的室があるが、そこでは車いすの使用が禁止されている。車いすバスケットボール等のハードな競技だとかなり床に傷がつくため使用できないところもあるが、私たちが行っているハンドサッカーという競技はボッチャのような非常に穏やかなスポーツだ。しかし、ここではボッチャも利用できないのが現状だ。所管課に以前からお願いをして、なんとか穏やかなスポーツだけでも実施できないかとお話をしていたところ、昨年度末にハンドサッカーの競技を

見学に来てくれて、前向きに利用を検討していただいている。こういった障害者スポーツへの理解が広がり、東京2020大会が終わった後も施設を使用できる環境が広がるようにしていきたいと思っているので、今後もよろしくお願ひしたい。

・スポーツ推進委員は、区民の皆さんにスポーツの楽しみを理解していただくことと、スポーツを通してのコミュニティ作りに寄与するために活動している。第7回の会議の後、各地区に実行委員会を設けて行うコミュニティスポーツ大会、中央大会で審判をやってきた。それから、シティーハーフマラソンでもボランティアリーダー等としてお手伝いした。

また、新宿区ではいきいき体操という介護予防の体操が誕生してから8年経過しており、その普及に力を入れようということで、スポーツ推進員が去年の秋に新たに6名サポーター養成講座を受講した。とてもいい体操なので、今後新宿中に広がっていき、スポーツ実施率を上げるための一つの方策になればと考えている。よく課題に挙がるスポーツをしない方にどのようにスポーツをしていただくかということについては、一番簡単なのは職場で体操してもらうことではないか。毎日やれば、一週間で一時間近くになる。新宿いきいき体操は立ってでも座ってでもできるので、これを職場の一つとしての区役所で実施してもらいたい。現在も2階の福祉部で管理職の方が始業前に体操されているそうなので、これが1階、3階と、どんどん広まって行けばいいなと思う。

あと、昨年から新宿区でボッチャとゴールボールの普及に着手しているが、昨年はまず競技紹介として地域で講習会を実施した。なかなか評判がよくて、引き続き地域でもやりたいという声を聞いている。29年度はいつもスポーツ推進員がお手伝いをして教えるのではなく、地域で自主運営できるように事業展開し、一歩二歩進んだ形にしていきたいと考えている。

イ 各課での取り組みについて

・生涯学習スポーツ課

東京2020大会に向けた通訳ボランティアの講習会の募集はすぐいっぱいになった。29年度も同様に実施されると思うので詳細が決まり次第委員の皆さまに周知する。先ほど、様々なボランティアや聖火リレーの話が出たが、詳細は私どものほうにもまだ分かりかねる状況だ。分かり次第、区からも発信をさせていただきたい。

今、国でスポーツ基本計画の修正が行われており、それを受けて東京都でも来年度計画を作り直すと聞いている。区としてはこの動きをしっかりと注視する必要がある。また、区では29年度が総合計画の最後の年になるため、平成30年度からの新たな計画を作成しなければならない。新しい計画でのスポーツ実施率の取り扱いについては、現状新宿区はあまり数字は高くないが、国も都も70%台という数字を掲げていくと聞いているので、区としてもこの辺りを目指す必要があると考えている。

29年度については東京2020大会に向けて、オリンピック開催1,000日前イベントやパラリンピック開催1,000日前イベントを実施する。時期は10月と11月を予定しているので、詳細が決まり次第お知らせする。また、29年度には新宿区にフラッグツアーが回ってくるので、その際にフラッグツアーを盛り上げるためのイベントを検討している。先ほど話の出たボッチャとゴールボールに関しても引き続き普及を進めていくので、ご協力をよろしくお願ひしたい。

先ほど話のあった新宿NPOセンターの多目的室で車いすが使えないという話については、こち

らからも使えるように後押しをさせていただき、なんとかしたいと考えている。

・新宿未来創造財団

新宿未来創造財団の事業は多くの地域の団体にご協力をいただき、支えていただいているので、改めて感謝を申し上げます。先ほどから話に挙がっている新宿シティハーフマラソン・区民健康マラソンは、12,000人を超える方のエントリーがあり、最終的に1万人を超える方にご参加いただいた。今回も安心安全な大会とすることを大きな目標に掲げて開催しており、こういった実績の積み重ねが先ほど話のあった新宿区全体での開催等の大会規模の拡大につながっていくと思う。また、今回3kmの中学生の部の申し込みが少なかったため、中学校に働きかけを行いながら、多くの中学生に楽しんでもらえるような環境づくりをしたいと考えている。

3月にトップアスリートによる小学生水泳教室を新宿コズミックスポーツセンターで予定している。リオデジャネイロ2016大会に出場した古賀選手、北京2008大会のシンクロナイズドスイミング代表の松村選手に来ていただき、小学生3年生から6年生を対象としている。生でアスリートの本当の動きを見せていただけるということで、これは子どもたちにとって大きな刺激となるのではないかと考える。他にも、3月の半ばにブラインドサッカー体験教室を予定している。そして、29年度に向けては、パラリンピック種目を応援する大きな展示パネルを作成しており、区内の様々な場所に展示して啓発に役立てたいと考えている。また、障害のあるなしに関らず、誰もが楽しんでいただけるスポーツを行うことを新宿未来創造財団の重要なテーマとしている。スポーツは本当に子どもから高齢者まで様々な対象の方が居るので、多くの方に楽しんでいただけるように、区内の様々な資源を活用させていただきたい。

・障害者福祉課

現在、東京2020大会に向けて地域で障害者スポーツが盛んになってきており、障害のあるアスリートの方が今までにないくらいテレビに出演されている。この状況下で障害者福祉課としては、障害のある方もない方も同じ環境のなかで協調してスポーツをするための共生社会の実現に向けた活動をしている。平成28年度に障害者差別解消法が施行されてことを受けて、障害のない方においても、精神・知的・身体等の様々な障害の状況に応じた合理的配慮を自然にできるように区民の皆様へ周知を進めているところだ。また、東京2020大会に向けて外国の方が多く新宿にもいらっしゃると思うので、障害者差別解消法の趣旨を知っていただくために、引き続き取り組みを進めていきたい。

・地域包括ケア推進課

地域包括ケア推進課では、秋の恒例となっている関係団体にご協力いただいているいきいきハイキングをはじめ、高齢者クラブでは輪投げ大会等、様々な年齢のステージに応じたスポーツ、レクリエーションの実施に取り組んでいる。先ほどもお話を挙げた新宿いきいき体操も、皆様にご協力いただきながら、さらに草の根で広がっていくように取り組んでいきたいと思っている。

・子ども家庭課

子ども家庭課では先ほどご紹介のあった地区青少年育成委員会を担当しており、地域の活動にお

いては青少年育成委員の皆様のご協力のもと、乳幼児から小学生、中学生、高校生、大人に至るまで、スポーツを楽しむ環境を整えるための取り組みをしている。

また子ども家庭部としては、保育園や子ども園、学童クラブや放課後の居場所等の事業も担当している。特に今年度から、園庭の場所の確保が難しいという課題に対して、公園等の連携場所を確保して、日常的に体を動かして遊びのなかからスポーツに繋げていくといった機会を持つための取り組みを体系的に行っている。また、運動会の会場として、私立の保育園等も含めて学校の協力を得ることで行事が必ず実施できるように、教育委員会とも連携を深めはじめたところだ。

・みどり公園課

スポーツをするための環境として、まず公園を安全な状態に保つのが基本と考えているため、毎日色々なところを回って安全な環境の提供に努めている。個別的な例でいうと、清水川橋公園のバスケットボールのゴール下のダスト舗装の地面がえぐれて、雨のあと水浸しになって使えないという状況だったため、きちんと舗装して雨のあとでも使用できるように整備した。公園という場所の特性があって、全てのご希望に沿えないこともあるが、利用される方とお話をさせていただきながら、一つ一つ取り組みを進めていきたいと考えている。

・教育調整課

教育委員会では、東京2020大会を契機とした教育の推進として、区内の小中学校でオリンピックを招致して運動に親しむための取り組みをしている。また、スポーツギネス新宿という名前で小中学校でのスポーツ実施の事業を行っており、小学校では児童が運動の楽しさを感じることができるよう、縄跳びの二重跳びの記録やバレーボールのパスの続いた回数の記録を取って競っている。また中学校では、運動に接する機会の二極化の傾向があるため、多くの中学生がスポーツに親しむ機会を持てるように、ダブルダッチという縄跳びを二つ使ったスポーツを推進している。他にも、障害者理解教育の一環として28年度はブラインドサッカー体験を小学校8校、中学校2校で実施した。29年度は障害者スポーツの体験事業を全校で予定しており、ブラインドサッカーのほかにも車いすバスケットボール、ゴールボール、シッティングバレーボール、ボッチャ等の種目を実施したいと考えている。

ウ 各報告を受けての自由意見

・フラッグツアーについて、オリンピックのフラッグを持って各小中学校を回ると聞いたが、具体的にどのようなことをやるのか教えていただきたい。

→（生涯学習スポーツ課）小学校・中学校・特別支援学校の全校でフラッグを囲んで記念撮影をし、撮影した写真を子どもたちに配布したり、パネルを作成するということだが、これ以上の詳細な話はまだわからない状況だ。なお、短い期間で全校回る必要があるため、各学校にフラッグがある時間はあまり長くは取れないと聞いている。

(4) 障害者スポーツに関する意見交換

・生涯学習スポーツ課

新宿区の取り組みについてご説明する。平成28年8月にトップアスリートの練習見学体験として、リオデジャネイロ2016パラリンピック競技大会に出場するゴールボール女子日本代表の選手の壮行会を実施して、かなり多くの方が見学にいらした。このトップアスリートの練習見学体験会は29年度も実施したいと考えており、種目を調整している。このようなトップアスリート練習や試合を見学できる環境は引き続き作っていきたいと考えている。新宿スポレクにおいて障害者スポーツの見学体験会を実施した。他にも、引き続きボッチャの指導員養成講座に力を入れて行こうと思っている。先ほど話に出たように、地域で審判できる方が育っていけば、地域でもより障害者スポーツが広がっていくと思うので、そういったところにも力を入れていきたい。

29年度には、教育調整課からの説明のとおり、全小中学校でパラリンピックの競技が体験できる取り組みを実施する。また、障害者のスポーツ体験として障害者も健常者も楽しめるように障害者スポーツの理解を促進し、障害者と健常者の心のバリアフリー化を進めていくような取り組みを行いたいと考えている。具体的な進め方まだ検討中のため、よい方法があれば、ぜひご意見をお聞かせいただければと思う。

・1月25日の全国紙の朝刊に、全国の障害者スポーツ57団体の実態調査の記事が掲載されており、障害者スポーツを振興するうえでの課題が3点挙げられていた。これは実践団体へのアンケートなので、かなり現実的な問題だと思う。1点目は施設が少ないこと、2点目はスタッフが少ないこと、3点目は施設へのアクセスが不便であることだ。昨年11月に新宿区レクリエーションフォーラムを開催した際にも、障害者スポーツの振興の話題のときに全く同じような課題が議題として取り上げられている。

新宿区レクリエーション協会では平成29年度の具体的な方針として、障害者スポーツの振興のために、何かひとつ新しい種目を考えることを決めている。区内の障害者の方がスポーツをあまりやっていないと聞いて大変ショックだったので、その状況の打開のためにも、なにかを進めたいと考えている。また、新宿区は東京2020大会の主会場の一つとなるのだから、障害者スポーツという言葉は徐々に使わないようにしていくとともに、区民全体で楽しむスポーツの場づくりをしていく視点を持つ必要がある。そのためには、新宿区体育協会とスポーツ推進委員協議会の二つの団体に大きな旗を挙げていただいて、関連団体がそれをしっかりと支援しないといけないと感じている。平成25年度策定のスポーツ環境整備方針では、地域団体やスポーツ団体の役割について記載があるが、新宿区レクリエーション協会はこの4年間役割に見合った働きをできなかったことを反省している。他の団体でも、平成29年度の計画があればお聞かせいただきたい。

・以前、障害者スポーツという言葉がなくなることが、2020年の最大のレガシーなのではないかと発言した。しかし、それは障害者の方に聞くと両論ある。両論というの障害者という言葉がなくなることで、逆に軽視されてしまうのではないかという恐れもあるということだ。

先ほど出た話で気になったのだが、新宿区では車いすの体育館の使用は制限されているのか。

・車いすの使用ができない施設がある。子どもたちのハンドサッカーの練習場所として、新宿区NPOセンターの多目的室を利用した際に、床が傷付いたから今後は使用しないようにと言われた。障害者スポーツへの理解はしていただいているが、そもそもその施設は昭和の初めのころの建物なので、どうしても床が柔らかくて傷付きやすいということもある。年2回のワックスでしのいでいる状況ということだが、なんとか今前向きに検討していただいているところだ。

・日本人は靴を脱ぐ文化があるため、床をきれいにしたり清潔にするという意識が強いが、外国では靴を脱いで体育館に入るといったことはありえない。床が大事なのか、人が大事なのか、本末転倒のように感じるので、ぜひ新宿はそこを変えていただきたい。

先ほど話のあった車いすバスケットボールも、そういう競技があるというだけで、障害者ではなくても健常者が車いすに乗ってやればいだけだし、ハンドサッカーにしても、健常者がやればいだけなので、障害者スポーツと区別すること自体がそもそも大きな偏見だと考える。障害も程度の問題の話であり、私も眼鏡を外したら何も見えないが、この程度だから障害の手帳はもらっていないだけである。誰もその人なりの障害を抱えているはずであり、このような偏見を新宿からなくしたほうがいいし、なくさないといけない。新宿区には他にも在日外国人等、色々な人がいるので、行政の方の発言にあったスポーツと共生社会づくりを進めていくことが、2020年以降の新宿の最大のレガシーになるのではないかと思っている。

・新宿区スポーツ推進委員協議会でも、障害のある人ない人という言い方は止めたいという話はよく出ている。しかし、いきなり外してしまうと、何かしらのアクシデントがあるかもしれないから、徐々に馴らして行って、いつかはなくしていきたいというように考えている。早いほうがいいが、この場で話し合うことが一つの近道になるかもしれないので、皆さんのご意見をお聞きしたい。

・障害者を差別しないというのは我々の責務だが、私の接した障害者のなかには「私は障害があるからもっと大切にしてほしい」という態度の方もいた。我々もそうだが、一部の障害者の方にも、自分が障害者だという意識を取り払っていただく必要があるように感じている。

先ほど車いすで体育館を使えないという話があったが、我々もダンスで靴を履いて体育館を使えなかった時代がある。今は新宿コズミックスポーツセンターと新宿スポーツセンターは問題なくなったが、以前はダンスのシューズは使わせないということで、施設の方と何度もやりあったこともある。これは全国的な話で、新宿だけではない。だから、車いすではそういった抵抗がもっと強いのではないか。先ほども話にあったように、床は壊れたら直すものだ。ダンスをやったら靴で傷がつくと言われたが、卓球やバレーボールのボールを落としてしまったときのほうがよほど傷つくし、へこむこともある。今後、より皆さんへの理解が進んでいけば、こういった問題はなくなると思う。

・皆さんに理解してもらうにはどうしたらいいか、こうしたらもっと理解しやすいというのがあればご意見をお願いしたい。先ほどの話にもあるように、確かに障害のある人もなにかしらのバリアを持っているのかもしれない。同様に、障害のない人も、障害がある人に対してバリアを持っているのかもしれない。お互いにそのバリアを取り払えれば、より共生がスムーズに行くのではないか。

・現在アメリカの大学で教えているが、アメリカではセクシャルハラスメントや生活上の不便さについて理解していないと、教員になる資格を取ることができない。アメリカではこういったマイノリティに関する講義を教育の一環として行っているが、日本の教育システムにはないため親も子どもも慣れておらず、日本の教育に欠如していることだと感じている。この人は障害があるからなんとかしようと逆にやりすぎてしまったり、あるいは避けてしまったりと、そういったことが直感的に私たちには植え付けられている。親や大人になったから平等にやりましょうとはなかなかいかなので、本当に難しい問題である。

アメリカでは、ほとんどの人が何かしらの不便さを抱えて生きている。私の友人には肥満の人も多くいるが、特別扱いすることはなく、なにか困っていたら自然に手伝ってあげるという文化が浸透している。日本では、国語や数学等の授業が大切にされている一方で、不便さを感じている人々のことを理解するための教育があまり重要視されていない印象があり、日本とアメリカの教育システムのギャップを感じる。

・日本でも義務教育のなかに復籍校交流という、今本来通うべき小中学校に籍を置きながら、特別支援学校に通うシステムがある。特に新宿区は区立の養護学校があるので、復籍校交流が比較的積極的に行われている。希望があれば地元の小学校に週1回通うことができ、所属するクラスがあり、クラスのお友達もいるという状況だ。しかし、残念ながら小学校低学年くらいだと比較的分け隔てなく声を掛けてくれるが、小学校高学年から中学生になると、以前声を掛けてくれた子どもも掛けてくれなくなることがある。また、中学受験をする児童も多いので、学校によっては交流の時間をあまり持たないところもあり、学校によってかなりの格差を感じている。

もちろん社会に出た大人に色々な手だてをするのも一つの考え方だが、先ほどのご意見のように、教育の場で隣に車いすの子どもがいるのが当たり前であるということも大切だと思う。よく、欧米の漫画だと車いすのキャラクターが出てくるが、日本では子どもが見る番組に障害者が出てくるとはあまりない。日本は漫画の文化がものすごく栄えているし、世界中にも発信されているが、障害に対するある意味差別的な発信の仕方が根底にあるように感じられて、少し気になっている。

・障害者スポーツの勉強会等では、幼児は障害のある人とも普通に遊べるんだとよく言われるが、本当にそのように思う。子どもは普通にできることが、大人になるとだんだんできなくなっていく。私たちが置かれている環境にも影響していると思うので、教育委員会にはぜひ子どもたちが障害のある方に触れる機会を増やしていただきたいと思うし、大人の方にも普通に接すれば大丈夫だということをアピールしていきたい。

・障害者団体としてだが、先ほどからお話にあるように、障害者自身が自分たちのなかに垣根を持っているということは当然に考えられる。そこに至る経緯があって、そうならざるをえなかった部分もあると思うが、それもスポーツを通じて交わることで取り払っていくことは可能ではないかと思っている。その方法としては、健常の方も車いす乗って一緒にバスケットボールをやれば車いすバスケットボールになるというように、同じ土俵に立つことが大切なのではないか。例えば、ブラインドサッカーも我々も目隠しをすれば一緒にできるし、我々がボールに触ろうと思っても全然触れないのに、選手の方は本当に上手にボールを扱うことができ、そのすごさを感じることができ

る。それだけで今まで障害者だと思っていた方が実はすごい人なんだと感じる意識の変化が起きるので、実際に一緒にやる必要があると考えている。口で言われても理解できないこともあるので、両方が互いに歩み寄る環境や場を作っていくことが大切だ。

また、教育でも重要なことがたくさんあるので、ぜひ学校教育の中で障害者への理解を進める授業を取り入れていただきたい。先ほど、障害を持っている人の一部には、もっと自分に配慮してほしいというようなことを言う人もいるという話があった。障害の難しいところは個別に障害の状況が違うところであり、一通りのやり方だけではだめで、どう配慮するのがよいのか難しいところがある。しかし、配慮すべきものもあるが、配慮しない配慮もあると思うので、その加減を障害のある方と接するなかで自然と体験していくことが大切である。

行政でどこまでできるのかという問題があるが、行政ができないことは民間でも色々な協力をしてくれる。例えば、日本サッカー協会が立ち上げた日本障害者サッカー連盟が中心となって、昨年7つの障害者サッカーの関係者を集めての障害者サッカー体験会が行われた。この際、東京都内のJリーグやFリーグ、なでしこリーグのチームの人達が来てくださったり、色々な企業が協賛してくださって、非常に多くの団体の協力を得ることができた。障害者スポーツに協力的な企業は新宿にはたくさんあると思うので、そういった力をうまく使うことで障害に対する意識を変えることも、障害に対する理解を進めるための一つの方法なのかなと思っている。我々だけでなんとかしようとするだけではなくて、色々な力を上手に使うことをもっと考えていいのと思うので、我々ももっと広い視野を持つべきである。

4 行政からの連絡について

- ・平成29年度も引き続き皆様に委員の継続をお願いしたい。
- ・平成29年度の会議については、日程が決定次第お知らせする。